

氏 名	なわ 縄 田 浩 志
学位(専攻分野)	博士 (人間・環境学)
学位記番号	人 博 第 206 号
学位授与の日付	平成 15 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻
学位論文題目	乾燥熱帯の沿岸域における人間・ヒトコブラクダ関係の人類学的研究 ——スーダン東部、紅海沿岸ベジャ族における事例分析から——

論文調査委員 (主 査) 教授 福井勝義 教授 山田孝子 教授 菅原和孝
助教授 太田 至(アジア・アフリカ地域研究研究科)

論文内容の要旨

本論文は、スーダン東部、紅海沿岸ベジャ族を事例に、乾燥熱帯の沿岸域に焦点をあわせながら、人間とヒトコブラクダの関係を人類学的に解き明かそうとするものである。

研究目的は、人間とヒトコブラクダの関係を多角的に分析すること、また紅海の沿岸域への適応機構をとらえること、という2点である。具体的にいえば、つぎのとおりである。1) 乾燥熱帯の沿岸域において、人間とヒトコブラクダの関係は、牧畜という枠組みだけではとらえられないことを示し、それが生態・社会・文化といった側面において果たす役割を考察することにある。2) ヒトコブラクダが複数の生計様式を支えることによる巧みな環境利用によって、ベジャ族が紅海の沿岸域を生活圏とする適応機構を発展させてきたことを民族誌的に描き出すことにある。

本論文は、5部構成の12章からなる。

第1部では、上記2点の研究目的をかね、調査民族、調査地、調査期間と調査方法の概要を示している。調査地は、スーダン東部の紅海沿岸に位置するベジャ族の一村落である。

第Ⅱ部では、自然環境と土地利用の分析から、ヒトコブラクダの管理技術と牧畜の生態的特質を探っている。最初に、水場の個別的な利用状況を述べて、塩水化した浅井戸がラクダの水場として利用されることを指摘する。塩水侵入などにより塩分濃度が高くなった水を飲ませることを、ラクダ飼養の特徴としてとらえなおしている。つぎに、経験的に身につけた植物に対する知識を根拠として、植物の特性に応じた家畜間の嗜好性の差異を詳述している。その結果、「半灌木の塩生植物を好むラクダ」と「草本や半灌木の甘生植物を好むヤギ、ヒツジ、ウシ」といった特徴が示される。さらに、家畜の摂食行動と放牧地利用の季節性とのかわりを追っていくと、ラクダは塩生植物とマングローブに依存した摂食をとっており、ラクダによってのみ利用可能である草地・灌木地が重要な役割を果たしていることが明らかになる。以上のことから、「海岸植生に依存するラクダ牧畜」といった牧畜システムの存在が提示されている。

第Ⅲ部では、牧畜とその他の生計様式の結びつきに関する分析から、ヒトコブラクダが支える多様な資源利用の社会的特質を取りあげている。まず、沿岸域における採集・漁撈活動サイトを明らかにし、流木、マングローブ、巻貝といった捕獲対象ごとにその使用目的を詳細に記述している。動物性食料や植物性飼料だけでなく、建材や燃料などの生活全般にかかわる用品を獲得していることを述べ、なかでも広域の交易ネットワークで流通している香料としての巻貝のふたが現金収入源であることに注目している。さらに、サンゴ礁地形と潮汐条件によって、ラクダを用いた島嶼利用のパターンが異なってくることを指摘している。島嶼利用のパターンは、「頻繁にアクセスできて長期間とどまれる島嶼」、「頻繁にアクセスできるが短期間しかとどまらない島嶼」、「稀にしかアクセスできない島嶼」、「全くアクセスできない島嶼」に類型化される。このような基礎資料をもとに、物理的環境、生物的環境、家畜の採食行動圏を、3次元上に単純化した模式図を作成し、ラクダを介した資源パッチの利用可能性に関する特質を浮き彫りにしている。ラクダを介さなければならぬことが条件となって、

結果的に沿岸生態系における生物資源の過剰な利用が制限されていることを示唆している。

第Ⅳ部では、ヒトコブラクダにまつわる名称群の文化的特質を、語彙と分類の分析を中心として扱っている。まず、沿岸域の小地名には、多面的な自然利用に立脚した景観認識が表出されることが明らかにされている。たとえば、ぬかるんでおり非常に滑りやすい泥質の干潟で、ラクダに乗って活動する時の注意をうながしている、“気をつけろ”という小地名がある。かわって、海洋哺乳動物に対する方名に着目すると、狩猟対象であるジュゴンとイルカは、“海の成メスウシ”と“海の成メスラクダ”として峻別される。陸の家畜種を対照しつつ、海の野生動物を対比させるこれらの方名には、ウシとラクダのあいだの社会的価値の相違が映しだされている。ジュゴンになぞられることによってウシは母子関係の絆が強く肉用としても優れている点が重視されるのに対し、イルカになぞらえることによってラクダは多くの頭数で群れを形作り乗用としても重宝される点が強調されているのである。最後に、ラクダの名称群を分析すると、ラクダの毛色変異に着目しながら、海岸環境への適応度、泌乳能力、乗用・駄用への有用性を見きわめる名称群を発展させていることが理解される。個体の系譜や交配関係を認識しつつ、用途に応じて異なった特性をもった個体を繁殖させるための交配管理を行う。そのなかで、“白”は海岸での活動に優れており、“赤”は乳の出がよいと彼らは価値づけしている。実際に、群れに覇を握る“白”と“赤”の割合は、隆起サンゴ礁島を主な放牧地にする群れと海岸平野を主な放牧地とする群れによって異なっていた。多様なラクダの放牧地と「色彩」名称にあらわれる差異が対応することが明示されている。

第Ⅴ部では、本論文の結論がまとめられている。紅海沿岸域は、アフリカ大陸を東西に走る乾燥地域と湿潤地域のエコトーンと、南北に走る陸域と海域のエコトーンという、2つのエコトーンの交差地と位置づけられる。そこに培われたラクダとの関係の構築は、＜自然環境の変化に対応する安全装置＞の役割を担っている。こうした観点からのヒトコブラクダの多目的な活用が、この地域に特徴的な人間とヒトコブラクダの多面的関係性である。

論文審査の結果の要旨

本論文の学術上の貢献は、スーダン東部の紅海沿岸ベジャ社会を対象として、人間・ヒトコブラクダ関係に焦点をあてることにより、乾燥熱帯の沿岸域への適応機構を人類学的な参与観察の手法により詳細に浮き彫りにしたことにある。

以下では、本論文で注目される主要な論点3つについて要約する。

第一に、本論文は、ヒトコブラクダが複数の生計様式を支えることによる巧みな環境利用の事例から、これまでの乾燥熱帯のヒトコブラクダ牧畜民像、また人間・ヒトコブラクダ関係の全体像に対して、大きな変換を迫る学術的意義をもっていることである。牧畜とは基本的に、人間では直接に消化吸収することが困難な植物相を、家畜という媒介を通じて乳や肉という形に変換して食物として利用することにより成り立つ生計様式をさしている。また、乾燥・半乾燥地域に適応しているラクダが、人間にとっての食生活の基盤を確保するだけでなく、交通手段として歴史的に重要な役割を果たしてきたことはあらためていうまでもない。しかしながら、ラクダが海岸部の資源利用のために必要不可欠なものとして重宝されてきたことには、これまで光があてられてこなかった。人間が限りある資源を利用する仕組み、その中でラクダは複数の役割を担ってきたことに多角的な検討を加えることにより、新たな視点から牧畜システムを描き出すことに本論文は成功している。また、「海岸植生に依存するラクダ牧畜」は、降水量と植物の純一次生産量の相関のうえには成り立たない牧畜システムである。そのため、これまで比較的単純に考えられてきたような降水量と植物のバイオマスの正の相関という前提とは異なる枠組みの上に、人間—家畜—植物関係をとらえなおさなければならないことを、論者は指摘している。このように、乾燥地域における牧畜システムを詳細に分析した点は、本研究のもっとも重要な論点の一つといえる。

第二に、社会生態学などの研究領域にも大きく寄与する、世界的にみても未開拓の研究分野を切りひらいた点である。具体的には、マングローブ生態系やサンゴ礁生態系が発達している熱帯・亜熱帯地域の沿岸域のうち、乾燥地域における人間活動、なかでも人間・家畜関係に着目したことにある。乾燥地域とマングローブ・サンゴ礁域が重なり接する分布域は、東アフリカのケニア北部からソマリアなどの北東アフリカをへて紅海を取り囲む全域、アラビア半島の国々、そしてペルシア湾に面したパキスタン、インドに至る範囲に展開している。それらの生物資源利用に関して、漁撈民の活動を中心に本格的な考察が加えられるようになってきているものの、沿岸域はまた、陸上生態系とのエコトーンでもあること、そして牧畜民の棲み場所でもあることには関心が払われることがなかった。本論文は、具体的にどのような資源を対象とした利用を行っ

てきたのかという点について、体系的な記述を試みている。人間による自然資源の獲得、生計活動にあらわれる社会性、またその上に構築される多彩な文化、といったいくつものレベルを包含する複雑にからみあった現象の中で、ラクダはいわば〈要〉のような存在であることが、本論文の事例研究から明らかになった。このような認識のもとにラクダ牧畜民の生業の複合性に留意し、自然環境と人間活動の相互関係からみた社会生態系としてのマングローブ生態系やサンゴ礁生態系などの沿岸域の特質を詳細に論述している点は、きわめて説得力をもつ。

第三の論点は、これまでほとんど明らかでなかったベジャ族という民族社会の特質を、丹念に浮き彫りにした貴重な民族誌的貢献である。古代エジプト時代の壁画や文字資料からは、ベジャ族の歴史は4000年前にまでさかのぼる可能性があり、文字資料によりたどることができるアフリカに暮らす最古の牧畜民の一つと想定される。しかしながらこれまで、長期間の現地調査をふまえた人類学的研究はほとんどなされてこなかった。論者は、現地語（ティグレ語、アラビア語）を駆使しながら、のべ約32ヶ月におよぶスーダンでの滞在期間中における観察とさまざまな聞き取り調査、また1年以上にわたる紅海沿岸のベジャ社会における住み込み調査から本論を展開している。人間とヒトコブラクダの共存を支える社会・文化システムと、それが培われる自然環境に関する具体的なデータがもつ資料的価値という点も、この論文の大きな成果である。

今後、本研究に期待されることは、ラクダ以外の家畜との関係性の記述・分析をくわえ、コミュニティにおける社会・文化システムの特徴をさらに解き明かしていくことである。本論文で提示された論点とそのようなアプローチが将来的に統合されることにより、より多面的な民族誌的事実にもとづいて、ベジャ族の生存戦略をめぐる議論が深まっていくことを期待する。

ベジャ族における事例研究から導き出された知見にもとづき、乾燥熱帯の沿岸域という社会生態系に注目し、生態・社会・文化の複雑なからまりあいの中から牧畜システムを実証的にとらえていくという、独創的な研究枠組みを提起した点は高く評価できる。以上のように、本申請論文は、文化・地域環境学専攻文化人類学講座にふさわしい内容を備えた優秀な研究成果として判断される。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成14年12月12日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。